

ふるさと再発見

～幕末維新と徳地～

ゆのき とさこ

柚木刀迫の砲台跡 ー四境戦争ー

大村益次郎が造ったといわれる砲台と硝煙小屋の跡（伝承）が徳地柚木にあります。

慶応2年（1866年）6月5日、幕府は長州藩に対して15万もの兵で総攻撃を開始しました。第2次長州征伐、いわゆる四境戦争です。「徳地の昔ばなし」（徳地町教育委員会発行）には「津和野口からいつ敵が攻めてくるかも分かりません。兵火の難に備えなくてはなりません。（村人に対して）『二つ切り』が鳴ったら用意をせい、『三つ切り』が鳴ったら竹槍と鎌をかついで出てこい、の布令^{ふれ}です。大切なものは井戸へ下ろしました。としゃくの中へかくしました。」と、その時の切迫した様子が描かれています。徳地の柚木には石見街道の出口がありますので、非常に緊迫した状態にあったであろうと想像できます。

大村益次郎は優秀な科学者でした。その彼が、石見方面の総大将として石州征長軍（福山藩・鳥取藩・松江藩・浜田藩・津和野藩）と戦ったのは有名な話です。当初、石州征長軍が攻め込む所として、藩庁の山口に近く、長州藩を二つに分断する徳地を考えたのでしょう。征長の軍が攻め込んでくるとみた柚木の石州街道出口を睨^{にら}み、山代街道と重なった刀迫の賽ヶ峠^{やましろう}に砲台を築いたといわれています。



中央奥「賽ヶ峠」（手前は柚野木小学校）

柚木高巣地区では「城を築くというので村人みんなが協力した。」という話が今も残っています。実際に、砲台を築いたといわれる平地と、兵士が銃を構えたであろう塹壕^{さんこう}も見取れます。おそらく急速に西洋化した軍備（四斤山砲やミニエー銃^{しきんさんぽう}）で武装し、散兵戦術^{さんべい}で石州征長軍を迎え討とうとしたのでしょう。しかし敵と思われた津和野藩は長州藩に協力をします。

長州軍は津和野の領地を通り、浜田藩の益田で戦って大勝したのは史実の通りです。

島根県の柿木村と柚木とはわずかに十数キロの距離。科学者・兵学者として戦いを指揮し、長州藩へ攻め込もうとする敵の心理を読んだ大村益次郎の力量を彷彿^{ほうふつ}させる伝承です。



県境「仏峠」からの柚木部落眺望